

XI. かかわりあいでは学ぶ体育授業（平成29年度の取り組みより）

XI-1. 小学校（齋藤）

授業者：齋藤 直人 学習者：小学校1部2年24名（男子12名・女子12名）

1 小学校期の「かかわりあい」の考え方

「かかわりあい」は基本的な動きや技能を学んでいくためには有効な学習方法であり、大切な学習習慣であると捉えている。また、体育授業での「かかわりあい」の充実が、他教科の学習および様々な教育活動での「かかわりあい」の充実にも繋がっていく可能性も大きい。

しかし、ここで気をつけなければならないのが、体育授業において「かかわりあい」は手段であることが多く、「かかわりあい」を単なる目的だけすることである。「できなかったことができるようになるため」「より高いパフォーマンスを発揮するため」「記録を更新するため」「授業の中のゲームにおいて得点するため、勝つため」など体育の授業としての目的や課題があり、それらを解決するための有効な手段の1つが「かかわりあい」だと捉えている。もちろん、それらの活動を通して「かかわりあい」方が学べることは想定される。

また、新学習指導要領で注目されている「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」とも「かかわりあい」は深く関係すると考える。それらのことから、私なりに解釈し、具体的な子どもの姿、教材の視点などを以下に示す。

楽しみ方や目的を共有して学習する姿→仲間とかかわって楽しい、仲間とかかわる必然性のある教材
助け合ったり教え合ったりする姿→教材や仲間と対話する学習習慣

これらを意識して授業を考え、展開していけば、子どもの具体的な姿や成果として現れると考えた。体育授業では、言葉での「かかわりあい」だけでなく、お手伝い・補助など身体活動を介した「かかわりあい」も大切にしていく。

今回は、仲間とかかわる必然性があり、仲間とかかわって記録を伸ばしていくことが楽しい教材である「むかえ回しとび」。自分で挑戦する課題をきめ、助け合ったり教え合ったりしながら、学習に取り組む「いろいろ壁逆立ち」。自分の動きを見ることができないからこそ、友だちにできばえを見てもらい、相互にアドバイスをして取り組む「大の字回り」。この3つの教材を扱った。それぞれに「かかわりあい」がある教材である。

2 活動計画

むかえ回しとび（20分×5回程度）※本時は1回目

いろいろ壁逆立ち（お手伝い逆立ち～壁逆立ちまで15分×12回程度）※本時は8回目

大の字回り（15分×5回程度）※本時は2回目

3 公開授業概要

むかえ回しは1回目を公開し、どのタイミングで入れればいいのかを考えた。全員のスタートラインに揃えたので、課題を解決しようとする意識は強く、考えたことを伝え合う「かかわりあい」をしながら全員が主体的に学びに向かっていった。いろいろ壁逆立ちは、子ども同士が自然に「かかわりあい」ながら、それぞれの課題に向かって学習に取り組んだ。欲張って新しいことに取り組んだのは反省点である。大の字回りは、「かかわりあい」のポイントを“目線”に焦点化させた上で、運動を見て気づいたことを伝えさせながら学習に取り組んだ。自分では気づけないことを伝え意識化し合うことで、動きの質の高まりが見えた。（齋藤 直人）

Ⅺ－２．中学校（関野）

授業者：関野 智史 学習者：中学１年生男女４０名（男子２０名・女子２０名）

単元名：陸上競技（長距離走）

１ 中学校長距離走授業における「かかわりあい」の考え方

長距離走単元の中で行われるペア学習を主体としたペース走には、そのペース設定と修正が大きな役割を果たす。単に１人で走り、終わった後に振り返るだけでは、ペースの感覚が鈍ってしまう。その時にできるだけ即時にフィードバックを行うために、ペアで学習を行うことがその効果を高める手法である。一見すると、個人競技である陸上競技の長距離走で、ペアの学習を重点化することで、かかわりあいながら学習を進めることができる。このような授業実践による長距離走、ペア学習を通して協動的に活動し、学習していることが示されている。まさに、『かかわりあい』を通して学んでいるといえると考えられる。

２ 公開授業概要

１）位置づけとねらい

本時は 12 時間の単元のうちの 5 時間目である。単元としての持久力の向上はもとより、意欲的な態度の育成や自己の能力・目標に適合した学習を進める知的側面の養成、ペース走の実施による、自己及び相手の身体活動をコントロールする知性の獲得もねらいとして設定している。

２）本時の目標

- ① 設定したペースにあわせ、ペースを意識して走ろうとする。＜関心・意欲＞
- ② 設定したペースと異なる場合に、合わせるようにペースを修正できる。＜技能＞
- ③ より適切なペース走を行うためのかかわり方にはどのような工夫があるか、改善の方策について、ペアで互いに相談・検討を行うことができる。＜態度＞
- ④ 互いのペース設定に対して、ペースタイムの結果を即時に評価・判断し、ペースの修正を働きかけるようなより適切なアドバイスができる。＜知識、思考・判断＞ 3 対 2 のゲームでのボールを持った際の選択肢と状況判断について理解し、実行できるようにする。
- ⑤ 自分だけではなく仲間の課題を見つけ、その解決に向けて主体的にかかわり、貢献できるようにする。

３）授業展開

集合、挨拶の後、その場で各自が安静時心拍数の測定を行った。学習カードに指定された 200m トラックの周回数に応じた各自のペースタイムの記入を行い、班ごとに活動場所に移動した。班ごとにアップを行った後、各ペアでペース走を行った。実施中は、設定したペースタイムとの差異について声を掛け合わせ、設定ペースに調整できるように活動を行った。走行終了後にも心拍数の測定を行い、ペアが記入した実際のタイムを確認した。互いに活動が終了したら、この日の活動をまとめ、感想、気付いた点などを学習カードに記入した。この日は、残雪がグラウンドにあり、コート面に 200m のトラックを仮設して授業を実施した。互いによく声を掛け合い、かかわりあいながら学習する場面が見られ、その達成感を共有する姿が各所で見られた。

XI-3. 高等学校（今西）

授業者：今西 智津子 学習者：高校2年生女子38名

単元名：バスケットボール

1 高校バスケットボール授業における「かかわりあい」の考え方

- ☆ 高校では、部活動などの経験者とそれ以外生徒の差が顕著に表れ、相互の「かかわりあい」ではなく、経験者の独壇場や一方通行の指示出しが多く起こる。
- ☆ バスケットボールでは複数・全体を見る視野や複合的な戦術知識や理解・気づきといった比較的高度な「オープンスキル」が必要になるため、多くの生徒が「かかわる」方法が分からないままつまづき、受け身・消極的な姿勢が生まれる。
- ☆ 教員側から、「かかわりあい」方の工夫を提示し、非経験者も一層主体的で深い学びにつなげていけるよう授業づくりを行うことが必要である。

2 本単元における「かかわりあい」の工夫

1) 扱う教材の工夫とゲームのルール制限

- 初期段階ではアウトナンバーを基本とし、発展段階でも3対3までとする。
- 使用する個人的なスキルを制限し、チームの協働を引き出す。

2) 「バーバルコミュニケーション」と「ノンバーバルコミュニケーション」の取り組み

- ハドル（円陣）やハイファイブ、名前を呼び合うことを推進する。

3) 「プラス1」の立場からの客観的に分析

- スポーツを「する」ことだけではなく「みる」「支える」「知る」ことに、意欲や面白み、重要性を感じ、そこから自他の技術や判断を向上させ、仲間やチームに貢献し、役割や責任を果たそうとする態度を育む。

3 公開授業概要

1) 位置づけと狙い

本時は14時間の単元のうちの2時間目である。コート上の「かかわりあい」だけではなく、コート外からの「かかわりあい」（分析）を行うことで主体的に状況判断の学習に取り組み、その正誤も学び合う。また、何が「出来て/出来なくて」現状の結果に結びついているのかを考え、自身の課題や仲間の課題を発見・共通認識し、次回以降のドリルや自主的な練習に対して課題意識を持つきっかけとする。

2) 本時の目標

- ⑥ 3対2のゲームでのボールを持った際の選択肢と状況判断について理解し、実行できるようにする。
- ⑦ 自分だけではなく仲間の課題を見つけ、その解決に向けて主体的にかかわり、貢献できるようにする。

3) 授業展開

- ① お助け鬼ごっこ…周囲を見て、仲間と協力することを遊びながら学ぶ。
- ② ゴール下シューティング…キャッチボイスやターゲットハンドを出し、シュートを打つ。
- ③ 2対1…周囲で声掛けをしながら「みんな」でオフェンスの判断を行う。
- ④ 3対2…「プラス1」の分析によるかかわりあいから、ボール保持者の判断を学習する。